

開放制教職課程学生の教育実習に対する不安の背景
とその解消に向けた取り組み：
教育実習に向けた実践力向上をめざす講座とそれ
に対する学生の評価

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学大学教育センター 公開日: 2024-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 泰之, 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000520

開放制教職課程学生の教育実習に対する不安の背景とその解消に向けた取り組み

—教育実習に向けた実践力向上をめざす講座とそれに対する学生の評価—

金子 泰之(静岡大学 教職センター)

松尾 由希子(愛知大学 文学部 教職課程センター)

要約：静岡大学の開放制教職課程で学ぶ学生が、教育実習時にどのような点で困っているか、また教育実習に向けてどのような支援を教職課程に求めているのかを、自由記述式のアンケートによって調査した。

次に、アンケートから抽出された結果から2つの取り組みを計画した。1つ目は、実習録の書き方を主な内容とする教育実習手引き作成であった。2つ目は、模擬授業と実習録の書き方を実践的に学ぶ教育実習準備講座の計画であった。

最後に、教育実習準備講座を実施後、それに参加した学生を対象としたアンケート調査を行い、その教育実習準備講座を評価した。

学生が教育実習準備講座に参加し、実習録の書き方や模擬授業を主体的に学ぶことによって、大学から教育実習校へのスムーズな移行が可能となることが明らかとなった。

キーワード：教員養成，開放制の教員養成，教育実習，教員養成の質保証

1. 問題と目的

学生の視点から見える開放制教職課程の課題 開放制教職課程で学ぶ学生を対象とした先行研究にもとづきながら、本学の開放制教職課程が抱える課題を以下にまとめていく。

浅川(2022)は、学生を対象とした自由記述式調査にもとづき、開放制教職課程における課題をまとめている。その結果、教育実習につながる課題と要望が学生から指摘されている。例えば、「教育実習日誌の記述分量が多い」や、「理科教育法問題」として、教科教育法の講義の中で、模擬授業のような実践的な内容が不足していることである。そし

て、「実習(授業を含む)を増やしてほしい」という指摘が学生から挙がっていると述べている。これに対して、浅川(2022)は、開放制教職課程の構造的な弱点に対する学生からの指摘と要望であると述べている。教育実習で求められる授業の組み立て方等、実践的な内容を学ぶ時間が不足していることが、開放制教職課程の課題と言えるだろう。

宮下(2021)は、学生が教育実習に行く前に、教職課程の授業の中で学んで役に立ったことを、学生を対象としたアンケート調査からまとめている。その結果、「模擬授業による授業づくり」を回答した割合が、2016年、2018年、2020年、3地点すべてにおいて高かったことが示されている。開放制教職課程で学ぶ学生にとって、教育実習に直接結びつく実践経験を学内で積み重ねることが、実習後に生かされることが分かる。

上記2つの調査から、開放制の教職課程で学ぶ学生にとって、模擬授業等の実践的経験を積むことが、教育実習に向けた準備として有効であることが伺える。

静岡大学における開放制教職課程の課題 本学では、人文社会科学部、農学部、理学部、情報学部、工学部において、開放制の教員養成課程を履修することができる(以下、全学の教職課程と表記)。

学部や学科に応じて、取得できる教員免許の学校種や教科が定められているため、学生は所属する学部、学科のカリキュラム沿って、教員免許取得に必要な科目を履修していく。全学の教職を履修する学生は、学部を卒業するための必要最低限である単位数124単位に加えて、教職の単位を取得する必要がある。そのため、全学の教職を履修する学生はカリキュラム上、教育学部の学生と比べて、教職に関する内容や教育実践に関する内容を学ぶ

時間が少ないことが課題となってきた。

つまり本学の全学の教職課程で学ぶ学生は、教育学部の学生と比べて、授業案の書き方、模擬授業等、実践的な内容を教育実習前までに十分に積み重ねることなく、教育実習を迎えることになる。そして、実習校に行き、そこで初めての授業を担当するのが本学で全学の教職を履修する学生の現状である。浅川(2022)が指摘している課題が、本学の全学の教職課程においても共通した課題として指摘することができる。中等教育を担う教員を養成する教職課程の質保証に向けた取り組みが本学では必要である。

本学の全学の教職課程では、学生が教育実習中にどのような点で困ったか、また教育実習前に、どのようなサポートを受けたかったか等、宮下(2021)や浅川(2022)のような学生を対象とした意識調査を実施してこなかった。そこで、まず学生が、教育実習に臨むにあたり、全学の教職課程にどのような支援を求めているのかを把握することにした。次に、学生の要望に応える取り組みを計画・実施し、最後にそれを評価するまでの一連の過程をまとめたことを本研究の目的とした。

具体的には、本論文は以下の3つの構成になっている。

1つ目は、学生が、教育実習中にどのようなことで戸惑ったのか、それを踏まえて教育実習の事前準備として、大学の講義の中でどのような取り組みを充実させてほしいと考えているのかを調べるために、教育実習を終えた学生に対して自由記述式のアンケートを実施した(学生の教育実習に対する意識調査:調査1)。この集計結果をまとめる。

2つ目は、調査1の自由記述式のアンケート結果から明らかになったことを踏まえて、2つのことを計画した。1つ目の計画は、学生が教育実習において躓きやすいポイントについて説明をまとめた教育実習の手引きの作成である。2つ目の計画は、教育実習に臨む学生の問題意識や教育実習への構えを作るための講座を計画することである(以後、教育実習準備講座と表記する)。教育実習の手引きの内容と教育実習準備講座の計画をまとめる。

3つ目は、計画した教育実習準備講座に参加した学生に対して、それを評価してもらうためのアン

ケート調査を実施し、その結果をまとめた。これによって、教育実習準備講座の取り組みを評価した(教育実習準備講座に対する学生の評価:調査2)。

上記3つから構成される内容にもとづき、教職センターが取り組んできた学生に対する支援を振り返ると同時に、今後の課題についても検討することを、本研究の目的とする。

2. 学生の教育実習に対する意識調査(調査1)

2.1. 目的

本学の全学の教職課程を履修する学生が、教育実習中に困ったことや、教育実習に向けてどのような支援を教職課程に求めているのかを明らかにする。

2.2. 方法

調査協力者と調査時期 第一著者が担当する教職実践演習を履修している、静岡大学理学部に在籍する学生を対象に、無記名の自由記述式のアンケート調査を実施した。2019年1月の教職実践演習の講義内で、講義担当者である筆者がアンケート用紙を学生に配布し、回収した。50名に配布し、全員から回答を得た。

質問項目と分析方法 自由記述式の質問項目は2つだった。1つ目は、教育実習中に困ったことや悩んだことを問う質問項目「教育実習中に困ったことや悩んだことは？」であった。

2つ目は、教育実習に向けた準備として全学の教職課程に求めることを問う質問項目「教育実習に向けて学生をサポートする体制について希望や意見は？」であった。

自由記述データを計量的に分析するために、計量テキスト分析のフリーソフトウェア KH-Coder (Version:3.Beta.07b) を用いた。

2.3. 結果

教育実習中に困ったことや悩んだこと KH-Coderの辞書に登録されていない単語を抽出するための作業を行った。教育実習に関する「指導案」「実習先の先生」の単語であった。

まず頻出した語と記述例を表1に示した。「実習」、「授業」、「生徒」、「指導案」、「先生」が相対的に多く出現していた。それぞれの頻出語に含まれる記述例も表1に示した。

表1 教育実習に困ったことの頻出語

頻出語	出現回数	記述例
実習	12	・実習先が母校でなく校風が違ったので、実習先の学校に慣れるまでが必死で、ストレスでした。 ・教職の授業は、理論がほとんどで実習での生徒の関わり方や授業のやり方など具体的な技術など少なかったと思う。 ・大学で教えてもらったように授業案を書いたら、実習先の校長にこれでは今は古いと言われてしまった。
授業	12	・高校で4週間の実習を行ったが、大学生が3クラスで4週間も授業を担当するのは負担だと感じた。 ・授業の練習をどのようにすればいいか、分からなかった。 ・授業づくりについてアドバイスがほしかった。
生徒	10	・実習後半の生徒との距離の取り方。慣れてくると生徒からの距離が近くなります。 ・実習先の先生が生徒として扱っているのか、対等な先生として扱っているのが本人でも区別できていないため、こちらが何を答えればいいのか分からない。 ・指導案や授業準備に追われ、生徒とのコミュニケーションがうまくとれなかった。
指導案	6	・最初は指導案の形をどのようにするべきか、略案なのか細案なのかなど悩みました。 ・指導案の書き方。
先生	5	・家庭の問題を相談してくれた生徒がいました。他の先生には言わないと言われて、私ではどうしようもできないし、と悩みました。 ・実習先の先生方(特に年の離れた先生)とのコミュニケーションが難しかった。どのように接していいのが困った。 ・実習先の先生のまねをして授業をしたら、つまらないと言われた。
コミュニケーション	4	・初対面の生徒とどうコミュニケーションとればいいのか分からなかった。
大学	4	・他大学のように実習期間を3週間にしてほしい。 ・大学の授業で教えてもらった指導案の書き方はあまり参考にならなかった。
慣れる	3	・慣れない環境で疲れが蓄積する上、学校のカリキュラムや生徒の理解度にも不安があった。
教職	3	・教職の授業は、理論がほとんどで実習での生徒の関わり方や授業のやり方など具体的な技術など少なかったと思う。 ・実習先では教師になる以外の職も考えた方がいい、いろんなところに目を向けなさいと言われた。なぜ静岡大学の教職の授業では教職を取るなら教師になれと強制しているのですか？大学と実習先の意見の違いに困惑しました。
困る	3	・最初の1週間は本当に手探りだったため、困った。
時間	3	・実習時に時間内に終わらない課題を出された。 ・睡眠時間を確保できないことが大変でした。
実習先の先生	3	・実習先の先生からの飲み会の断り方。 ・実習先の先生からのモラハラ、パワハラ。
取る	3	・給食時間の生徒とのコミュニケーションの取り方。
書き方	3	・指導案の細案の書き方を習っていないため、書くことが困った。
悩む	3	・静岡県の採用試験の日程と東京都の日程が重なってしまったため、悩んだ。

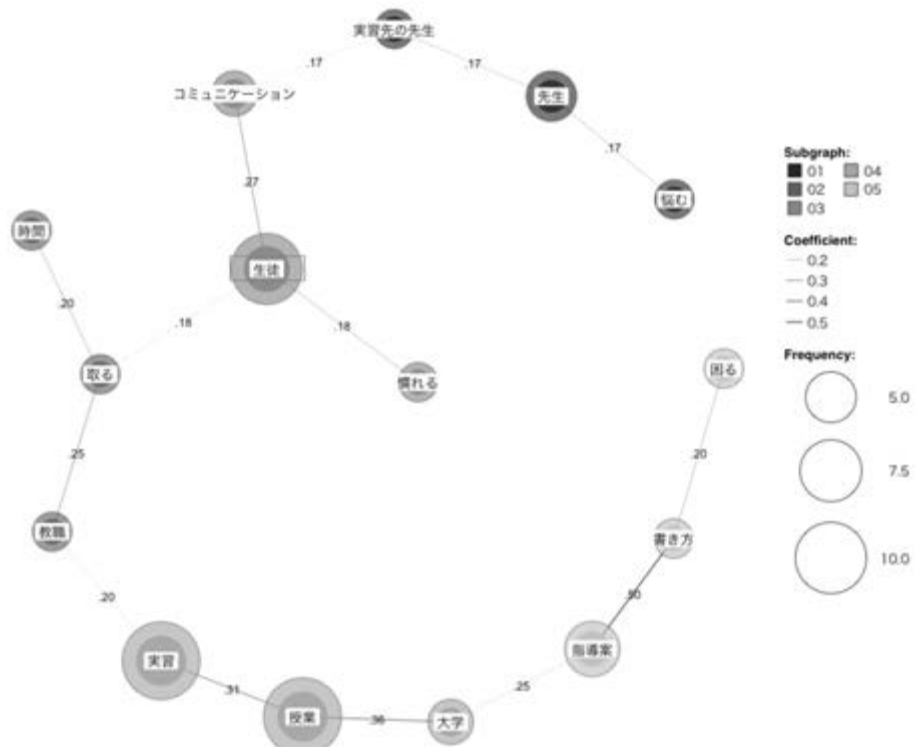


図1 教育実習で困ったことについての共起ネットワーク

次に、頻出語間の共起関係を分析した。共起ネットワークを、Jaccard 係数 0.1 以上の最小スパニングツリーを描画した (図 1)。

「実習-授業-大学-指導案-書き方-困る」の 6 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、実践的なことが求められる実習に対し大学の授業は理論寄りで困ったこと、大学で学んだ書き方とは異なる指導案と指導案の細案の書き方だったため困った、という内容を反映している。授業づくりについての内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「生徒-慣れる-コミュニケーション」の 3 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、慣れてきた生徒とのコミュニケーションに困ったという内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「時間-取る-教職」の 3 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、教職課程で指導される教員免許取得に向けての心構えが、現場の先生からの意見とは異なったことによる戸惑いや、教職の授業が理論寄りのために、教育実習で求められる実践的内容が不足している等の内容を反映している。また、時間内に課題を終わらせることが困難だったことや、実習中の睡眠時間の確保が難しかったという内容を反映している。大学と実習校での環境の違いについての内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「実習先の先生-先生-悩む」は、実習先の先生との関係づくりや、実習先における教員としての自分の立ち位置に悩む内容を反映している。実習先の指導教員との関係や、学生と教員の間立つ自分の立場に悩む内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

教育実習に向けた指導として求めること KH-Coder の辞書に登録されていない単語を抽出するための作業を行った。

教育実習に関する「教育実習」「指導案」「実習録」「研究授業」「お礼状」の単語であった。

まず頻出した語と記述例を表 2 に示した。「教育実習」「相談」「授業」「書き方」「教える」「良い」が相対的に多く出現していた。それぞれの頻出語に含まれる記述例も表 2 に示した。

次に、頻出語間の共起関係を分析した。共起ネットワークを、Jaccard 係数 0.1 以上の最小スパニングツリーを描画した (図 2)。

「教育実習-相談-大学-連絡」の 4 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、教育実習中に困ったことを大学に連絡・相談できる体制づくりを求める内容を反映している。教育実習中に困ったことが生じた際の対処方法を相談できるようになることを求める内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「書き方-指導案-お礼状-教える-良い」の 4 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、指導案やお礼状の書き方を教えてほしいという内容を反映している。教育実習前後で求められる書類や指導案の書き方を具体的に指導してほしいという内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「授業-実習-知識-礼儀」の 4 つの頻出語で構成されるカテゴリーは、実習中の礼儀や授業見学で観察するポイント、先輩がどんな研究授業をしたのか等、教育実習に役立つ知識がほしかったという内容を反映している。教育実習中の研究授業につながる実践的な指導を求める内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

表2 教育実習に向けた準備として全学の教職課程に求めること

頻出語	出現回数	記述例
教育実習	10	・教育実習での1日の流れや礼儀を詳しく教えて欲しかった。 ・教育実習前に、模擬授業をしておくのも良いかなと思った。
相談	5	・教育実習中に、大学にメールや電話で相談ができるようになるとうりありがたい。 ・教育実習相談窓口フリーダイヤルとかあれば相談しやすい。
授業	4	・自分が担当する授業数と日数について、あらかじめおよその基準を示してほしいと実習校に伝えてほしい。 ・過去の卒業生が、教育実習中にどのような授業をしたのか等、いろいろなデータが見られるようにしてほしい。
書き方	4	・教育実習前の講義でお礼状の書き方、指導案の書き方を教えてもらったのは良かった。
教える	3	・指導案の書き方、お礼状の書き方、実習でのマナー、授業見学で何を学ぶか、日誌の使い方など、教育実習で役に立つ知識を教える授業があった方が良かった。
良い	3	・教育実習中に困ったとき、すばやく相談できるよう、連絡がとれば良いと思います。

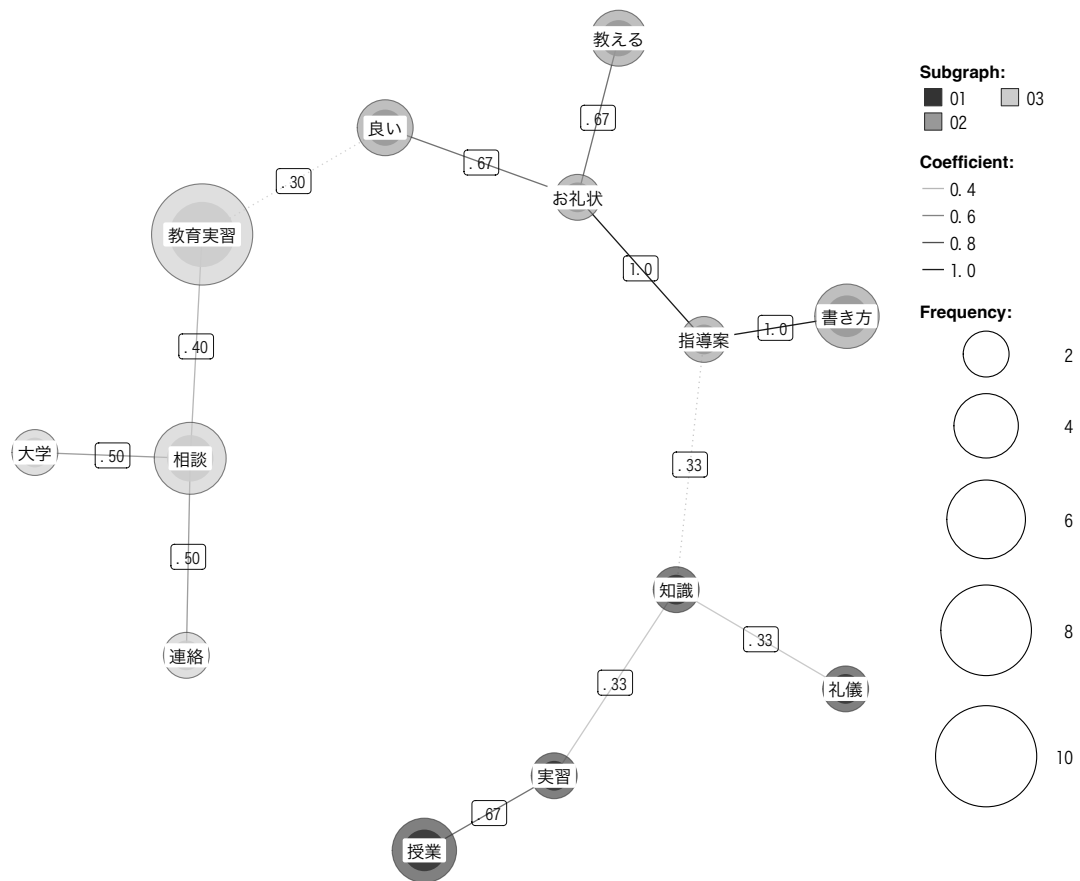


図2 全学の教職課程に求めることの共起ネットワーク

2.4. 考察

調査1の目的は2つだった。1つ目は、学生が教育実習中に困ったことや悩んだことを探索的に明らかにすることだった。2つ目は、教育実習を終えて学生が振り返ったときに、全学の教職課程にどのような支援を求めるのかを探索的に明らかにすることだった。

教育実習中に学生が困ったこととしては、教員や生徒とのコミュニケーションと関係づくり、大学で学んだことと実習先で求められることのずれ、授業案の書き方など授業に関する実践的な技術不足であった。それに対して、学生が教育実習に向けた準備や対策として求めることは、実習中に困ったときに相談できる窓口の開設、お礼状・指導案の書き方の指導や研究授業に必要な技術など実践的なことを学べる時間であった。

教育実習中に求められる実践的な技術不足を指摘する学生からの声は、開放制教職課程の学生を対象とした調査結果（宮下，2021；浅川，2022）で

明らかになっていることと共通する。この結果を踏まえて考えられる全学の教職課程の支援を2つ挙げた。

1つ目は、教育実習中に学生が躓きやすいポイントや疑問に思うポイントをまとめた手引き作成と、その配布である。

教科指導法の授業や教育実習事前指導において、お礼状や指導案の書き方は指導している。しかし、それらの講義を受講し終えた後、時間が経過してから学生が教育実習を迎える場合は、学んだ内容が抜け落ちていと考えられる。教育実習中に学生が躓きやすいポイントや疑問に思うポイントをまとめた教育実習の手引きがあれば、学生が実習中に自分で振り返って確認することができる。

教育実習中に相談できる相談窓口の開設を求める意見も挙がっていたが、その要望にも対応できるのが、この手引き作成と配布である。学生が、教育実習中に困り相談したい場合は、実習校の先生

に相談することが基本である。それは、実習校や指導教員によって、指導方針や求められることが異なるからである。そこで、学生が教育実習中に困った場合は、まずは大学から配布された教育実習に関する手引きに目を通し、基本的な事項を確認する。それでも不明な点があった場合には、実習校の先生に相談するよう学生にも伝える体制とする。

2つ目は、教育実習で求められる実践的な指導技術を高めるための講座の計画とその実施である。具体的には、ある単元について教材研究をした上で授業案を書き、その授業案に基づいて模擬授業をやってみることである。宮下(2021)にあるように、学生が教育実習前に模擬授業をやってみることは、教育実習における研究授業の際に役に立つと考えられる。

以上より、全学の教職課程では、教育実習中に学生が躓いたり戸惑うポイントをまとめたりした手引き作成と、模擬授業の計画に着手することにした。

3. 実習録の書き方を中心にした手引き作成

手引きのねらいと5つの構成 学生が教育実習中に戸惑うものが、毎日記録することが求められる実習録である。学生からは、「実習録に何を書いたらよいか分からない」、「実習録を書くことに時間を要するため、生徒との関わる時間を確保できない」という声が挙がっていた。また、実習校からも、「学生が実習録を書けない」、「実習録の内容が薄い」などの意見が大学宛に届いていた。そこで、実習録の書き方を中心にした手引きを作成することにした。

この手引きは、5つの構成になっていた。

1つ目は、「何のために実習録を書くのか」である。実習録は、教育実習の単位を習得するために必要な時間数分の実習を終えたことを裏付ける証明書の役割を持つ。また、1日の実習を振り返り、記録することで、自分の体験を整理することができる。そして、実習校の先生からの助言から学び、次の実習に生かす役割があることをまとめている。

2つ目は、「実習録の2つの書き方」である。1日の時間の流れに沿って時系列での記述法と、印象に残った場面や考えたい事例に焦点を当て、それ

を詳述する場面記録中心の記述法である。この2つを使い分けながら実習録を記述することをまとめている。

3つ目は、「実習録の文章を具体的にどう書くのか、何を書くのか」である。教育実習における問題意識や目標がなければ、実習中に何をしたら良いのか分からず、また何を記録したらよいかも分らない。そのため、重要なのは教育実習中の問題意識や目標を教育実習前に明確にし、言葉にしておくことを述べている。そして、実習期間の1日の中で実践したいことや経験したいことを具体的に挙げ、それを頭に置いて毎日の実習に臨むことをまとめている。

4つ目は、「実習録を書くためにできる工夫や注意点」である。手書きの場合には字を丁寧にかくこと、自分の考えと客観的事実は分けて記述すること、実習中のメモの取り方や個人情報の取り扱いにおける注意点、学校の中で積極的に生徒と関わったり、何かをやってみたりすることで、書きたいエピソードが頭に浮ぶこと等をまとめている。

5つ目は、「事前準備として教育実習前にやっておくこと」である。教育実習で自分が何をやってみたいのか、何を学びたいのか、問題意識を明確にしておくことが何よりも重要である。そのため、それを明確にし、事前訪問のときには実習校の先生に実習中に組み込んでみたい課題を伝えられるよう、準備しておくことをまとめている。どうしても不明な点や困った点があった場合には、実習校の先生に質問し、疑問点の解消に努めることも記載している。

上記5つから構成される手引きを、筆者の講義内(履修モデルの中では3年生後期に履修する科目)で配布し、学生に教育実習に関する注意点も伝えた。

(文責：金子泰之)

4. 実習録の書き方と模擬授業を実践する教育実習準備講座の計画

教育実習準備講座計画の経過 教育実習準備講座は2020年度から実施している。その内容は「実習録の書き方指導」「授業案作成・その授業案の検討・模擬授業の実施」で構成しており、学生の意見や様

子をふまえて改良してきた。もともと講座を始める前から、一部の学生より教育実習への不安、特に授業について相談を受けることがあり、個別に対応していた。しかし、調査1からも授業案作成への悩みや助言のニーズ等が明らかになり、2020年度から講座という形態で希望者が受講できるようにした。初めて実施した2020年度以降、教育実習準備講座の内容を少しずつ変えており、2020年度、2021年度に実施した結果を踏まえて、2022年度の教育実習準備講座を計画した。参考として2020年度(表5)及び2021年度(表6)の教育実習準備講座の実施概要を本文末尾(付録)に掲載した。

2022年度の教育実習準備講座の構成 対面で行なう準備講座の内容として、2021年度から主にグループワーク(1グループ3～5人)で、「実習録の書き方」「授業案作成・その検討・模擬授業」を実施している。「教育実習録の書き方」は、「3.実習録の書き方を中心にした手引き作成」で述べたように実習録記述のポイントを整理した手引きを作成し、3年次後期の授業時に教員が解説した。

なお、準備講座初年度(2020年度)は「実習録の書き方」のポイント等をまとめた動画を配信したが、受講生から「実際に書けるかどうか自信がない」、教育実習を終えた4年生から「教育実習録の記入が難しかった」との声があがったことで、2021年度から実習録の記述も講座内容に加えた。準備講座における「実習録記述」は、できるだけ教育実習時の状況をふまえて、その日のプログラム(模擬授業の検討、模擬授業等)で自身が学んだスキルやグループワークでの意見交換の内容や気づき、自身の課題をふまえた次の目標等を記録する場面にした。毎回記入する時間を取り、記入したら同じグループで回し読みをして、3年生や助言者(4年生・大学院生の上級生)からコメントや助言をもらえるようにした。

授業について、3年生は50分の授業案を作り、1人ずつ模擬授業を行なった。グループは、できるだけ同じ教科の授業案を作る学生で構成し、グループに入り支援する助言者もできるだけ同じ教科の人とした。

助言者は、教育実習を終え、教職を志望する4年生や大学院生をTA(ティーチングアシスタント)

として雇用した。2021年度から、1つのグループにつき1人の助言者が入り、グループワークを主導しファシリテートした。そして、自身の授業案や教育実習録の記録を用いて3年生に説明し、質問に対応した。3年生が作成した授業案や実習録への助言、模擬授業時は授業者への指導助言も行なった。時間に余裕があれば、事前に3年生から集めた質問(「実習校で先生に注意されたこと」「実習に行く前にやっておけばよかったこと」など)も話してもらった。教職センターの教員だけでは、複数のグループに対応できないため、本講座に上級生の協力は欠かせない。

実施日とその内容 2022年度の講座について、実施日ごとの内容について、表3にまとめた。3年生の多くが4日間参加していた。「模擬授業とまとめ」は、5日間の日程の中からグループメンバーの都合の良い日を選んで実施してもらった。模擬授業は5日間実施したため、一部の3年生は自身の空いている日に他のグループの授業を見に行き、学ぶこともできた。

表3 2022年度「教育実習の準備講座」の実施概要

実施日	内容	グループ構成	受講者数	助言者
準備講座前	「実習録の書き方のレジュメ」を3年次の授業(78名)で配布し、教員が解説する。			
2023年2月22日 9時～12時	【1 授業案と実習録の書き方相談会】 ・グループの上級生が、実習録の書き方や授業案作成について説明する。 ・3年生がこの時間内に書いた実習録および授業案について、グループで検討。上級生の指導助言。			
2023年2月28日 (予備日3月2日) 9時～12時	【2 書いてきた指導案に対するグループ検討】 ・書いてきた授業案について、1人ずつ発表する。グループで検討。上級生の指導助言。 ・最後に実習録を書き、グループで検討。上級生の指導助言。	3年生・上級生 ※原則、同じ教科の学生で構成する。	40名	4年生・大学院生 (教職志望者) —13名 教科: 数学、理科、社会、英語、国語
2023年3月6日～ 10日 9時～12時 ※5日間のうち、 原則2日間選択	【3 模擬授業とまとめ】 ・模擬授業を行なう(1人50分)。 ・グループで検討、上級生の指導助言。 ・本講座の最後に実習録を書き、グループで検討。上級生の指導助言。			

(文責: 松尾由希子)

5. 教育実習準備に対する学生の評価(調査2)

5.1. 目的

教育実習準備講座に参加した学生が、実習録の書き方、授業案作成と模擬授業の経験をどのように捉えているのかを明らかにする。具体的には、学生を対象とした自由記述式のアンケートから、その講座に対する学生の評価を分析する。

5.2. 方法

調査協力者と調査時期 2023年の2月末から3月にかけて実施した教育実習準備講座に参加した学生

を対象とし、調査を実施した。教育実習を終えた後から教育実習準備講座に参加したことを振り返り、意見や感想を回答してもらうため、教育実習後に回答するように学生に依頼した。アンケートへの回答を依頼した時期は、2023年6月であった。オンラインから回答する自由記述式のアンケートであるため、回答フォームのURLを対象となる学生に送付した。

全学の教職課程を履修する学生の教育実習は、人によって教育実習の時期が異なる。実習時期は5月中旬から10月頃までと幅が広い。そのため、回答があった時期は、2023年6月から9月末までと幅が見られた。17名からの回答が得られた。

質問項目と分析方法 自由記述式のアンケートにおける教示文は「教育実習を終えた今、改めて振り返ってみたときに、教育実習準備講座に参加された方にとって、どのような講座だったのか、教育実習準備講座に参加した意義や感想、また教育実習準備講座への課題や改善点などを教えてください。」であった。

自由記述データを計量的に分析するために、計量テキスト分析のフリーソフトウェア KH-Coder (Version:3.Beta.07b) を用いた。

5.3. 結果

教育実習準備講座への学生の評価 KH-Coder の辞書に登録されていない単語を抽出するための作業を行なった。教育実習に関する「教育実習」「準備講座」「模擬授業」「実習録」「授業案」「指導案」「授業計画」「研究授業」の単語であった。

まず頻出した語と記述例を表4に示した。「授業」、「実習」、「書く」、「模擬授業」、「実習録」「準備講座」「講座」「自分」が相対的に多く出現していた。それぞれの頻出語に含まれる記述例も表4に示した。

次に、頻出語間の共起関係を分析した。共起ネットワークを、Jaccard 係数 0.1 以上の最小スパニングツリーを描画した (図3)。

「授業-模擬授業-先輩-講座-自分」の5つの頻出語で構成されるカテゴリーは、講座に参加し、模擬授業の実践を通して、自分では気づけなかった課題を先輩から助言され、それを教育実習中の授業に活かせた、という内容を反映している。教育実習を終えた先輩からの助言をもとに、授業の組み立て方について学べただけでなく、自分自身の課題や成長という自己理解が深まったという内容が

まとまっているカテゴリーと考えられる。

「実習-教育実習-準備講座」の3つの頻出語で構成されるカテゴリーは、準備講座に参加していなかったら教育実習が大変になっていたと思う、無事に実習を終えることができた、という内容を反映している。また、準備講座での内容が、教育実習における学校や生徒の様子とずれていたという内容も反映している。準備講座での実践的な経験と教育実習を対比させることで学生が感じた内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「実習録-書く-練習-書き方」の4つの頻出語で構成されるカテゴリーは、実習録の書き方を学んだり書く練習をしたりすることで、教育実習中に実習録を書く時に困らなかった、という内容を反映している。教育実習に行く前に、実習録の書き方を実践的に学ぶことへの肯定的な評価がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「経験-見る-同士-役に立つ」の4つの頻出語で構成されるカテゴリーは、同じ学科の学生、同じ教科の学生同士で模擬授業を見合っって意見したことが良い経験になった、役立ったという内容を反映している。同じ学科の学生、同じ教科同士の学生が互いに意見し合いながら、実践的に学ぶ関係についての肯定的な評価がまとまっているカテゴリーと考えられる。

「生徒-聞く-時間」の3つの頻出語で構成されるカテゴリーは、生徒とのコミュニケーションの取り方について話を聞いたかった、中高生の実態に近い雰囲気での授業ができるよう他学科の学生に模擬授業をしても良かったという内容を反映している。また、授業づくりに事前に慣れておけば、実習中に生徒とのコミュニケーションにもっと時間を割けた、という教育実習に対する反省点に関する内容も含まれている。教育実習準備講座では、模擬授業の実施と実習録の書き方に焦点を当てたため、生徒との関係づくりを考える内容までは取り上げていなかった。したがって、このカテゴリーは、教育実習準備講座に対する課題や自身の教育実習に対する反省点を指摘する内容がまとまっているカテゴリーと考えられる。

表4 教育実習準備講座に対する学生の評価

頻出語	出現回数	記述例
授業	31	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中身だけではなく、不安をものすごく減らすことができたので、気持ちの面でも模擬授業に参加してよかったと思いました。 ・模擬授業については、授業をすることではなく指導案を書くこと、計画をきちんと立てることを重点に置いた方がよかったと思う。 ・実習録の書き方の練習や模擬授業をしたことで、教育実習中にすべきことや授業で気をつけるべきことを予め知ることができ、非常に有益でした。
実習	24	<ul style="list-style-type: none"> ・準備講座で一番やってよかったと実感しているのは模擬授業で、経験があるないでは実習先での心構えが全然違ってたと感じている。 ・授業案の細案を書いたことは、実習中の時間がない中で書かなければならないときにイメージが湧きやすく、所々言い回しを利用するなどとても役に立った。
書く	22	<ul style="list-style-type: none"> ・実習録を書く練習をしていたため、また、早めに書き始めるといいことを教わっていたため、実際に書くことに対して何も苦になりませんでした。 ・準備講座で実習録の書き方を学べたことがとても良かったです。どのようなタイミングで書けば良いのか、どんなことを書けば良いのか等を事前に学べたことで実習中に計画的に実習録を書くことができた。 ・実習録を書いたり、模擬授業をしたりという講座内容もとても有意義でしたが、なによりもこの講座に共に参加した仲間たちと繋がりができたことが支えとなりました。
模擬授業	21	<ul style="list-style-type: none"> ・準備講座で一番やってよかったと実感しているのは模擬授業で、経験があるないでは実習先での心構えが全然違ってたと感じている。 ・模擬授業をして先輩や友人にアドバイスをいただいたことで、教育実習での授業は、そのアドバイスや自分の反省を活かすことができたと思います。 ・研究授業では相手が高校生で授業内容を知らない人のほうが多く、模擬授業の時のように計画通りの授業とはいかなかったが、模擬授業を行っていたので自信をもって授業をすることができた。
実習録	20	<ul style="list-style-type: none"> ・実習録の書き方については、実習中に困ることがなかったためとても良かったです。 ・実習録の書き方の資料をいただけただけのもとても参考になった。 ・指導案も実習録も、書けば書くほど慣れていくのを実感したので、準備講座の恩恵は大きかった。
教育実習	16	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習でも講座の経験があったからこそ自信を持って取り組めたと感じます。 ・自分は教育実習中に違う科目の教育実習生に授業を見てもらったりして意見を聞いたりしていました。 ・教育実習に行ってきた経験のある人から、実際の現場での展開やスケジュール、大まかな実習の流れや実習録の書くコツなどを聞くことができたのは、実習に行った際に役に立つのもそうだが、事前にイメージができるという点で非常に有意義かつ、落ち着いて実習に臨める効果があった。
準備講座	14	<ul style="list-style-type: none"> ・準備講座でも細案作りに時間をかけた方がよいと思う。 ・準備講座がなかったら、教育実習期間中様々な面でもものすごく苦労していたらと思うと感じます。
講座	10	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業に関しては、講座で取り扱わなくてもいいのではないかと考えている。教育法の授業でもやっていたし、実習校の状況(進度・設備等)が講座の時点ではわからないことがあったので想像がつきにくかった。
自分	10	<ul style="list-style-type: none"> ・実習を終えて改めてこの時の模擬授業を振り返ってみると、全然面白くない授業をしていた自分から、実習を通して発問方法や学習法などの引き出しが増えたことを再確認し、自分の成長を感じた。自分のレベルを知る上でとてもよかった。 ・実際に自分で授業案を作り、皆の前で実践するという事は準備講座が初めてでしたので非常に良い経験になりました。 ・個人的な感想として、先生方の授業を多く観察したことで、それらを参考に自分の授業のレイアウトを構築でき、授業の組み立てがやりやすくなったと感じた。
時間	9	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の構想にしても、一度実習の前にどれくらい自分が授業を作り上げるために時間を要するのか把握するのに役立ち、模擬授業で用いたやり方を実習の授業にも流用できたりと大いに役立った。ただし、実際の授業とは生徒の人数や教室の広さ、設備などの違いがあり、大きなギャップがあったが、それも含めて想像通りにはいかないという良い経験になったと思う。 ・私が実習中に大変さを感じたことは、一日の時間配分であった。 ・準備講座のなかで指導案作成や授業の構想にもっと慣れていれば、実習中にそれに割く時間をより短縮でき、より多くの経験が得られたのではないと思う。

練習	9	・実習録の書き方を事前に教わり、その上で書く練習もしていたため、実際に書く際に困ることはなかった。 ・実習録を書く練習は、本当にやっておいて良かったと思う。 ・この講座を受講したおかげで、実習録を書くことを練習できたので当日も練習通りに書くことができました。
経験	8	・実際に授業をすると、予想外の解答を生徒はしたりするので、そのような経験を一度でも教育実習前にしたほうがいいのではないかと思います。
書き方	8	・実習録の書き方は教わっていないと難しい部分があるのではと思う。 ・いざ実習中に実習録を書くとなったとき、書き方に関するプリントがあることに安心したため、プリントを配っていただいたことも良かったです。
生徒	8	・他の実習生との関わりや生徒との接し方に焦点を当てた話をもっと聞きたかった。 ・個人的に生徒と話す時のネタに困ったので、生徒のウケが良かったモノを教えてくださいました。 ・実際に授業をする相手は、単元を学んでいない中学生、高校生であるのでそういった生徒達の反応に近い反応をすであろう他教科の人にも聞いてもらうほうがいいと思いました。
良い	8	・私たちのグループは、模擬授業を考える時間中、自主的に実習の流れや雰囲気や質問していたが、プログラムとしてそういった現場での展開例を先輩に説明してもらう時間があっても良かった気がする。
先輩	6	・先輩が近くにいることで、教員採用試験、教育実習のことを気軽に質問することが出来ました。 ・模擬授業を先輩に見ていただいて生のアドバイスをいただけたことが教育実習に大いに役立ったと思います。
同士	6	・学科の人同士での絆が深まり、皆で実習、試験、頑張ろう！という雰囲気が出てよかったです。 ・同じ学科の学生同士ではなく、むしろ数学が苦手な学生などに授業を試みるのも、効果があるのではないかと感じました。 ・模擬授業については、同じ教科同士で模擬授業を見ましたが、異なる教科同士でもいいのではないかと思います。
聞く	6	・私学と公立で担当を分けて話を聞く機会があってもよかった。 ・実習録に関しては、準備講座と実習で学ぶ内容や濃さが違いすぎるので、準備講座で実習録を書く練習をしてもそれが実習時に参考になったかと聞かれればならなかった気がする
見る	5	・数学が得意な人にも見ていただけて、鋭い視点からの指摘も貴重で生かせました。 ・別の班の模擬授業も見れば良かったと振り返って思う。
役に立つ	5	・「歩きながら話すこと」や「声の大きさ」など、指摘されたことは大いに役に立った。 ・その後も情報交換をしたり、励ましあったり、実習の報告をしたりととても役に立ちました。

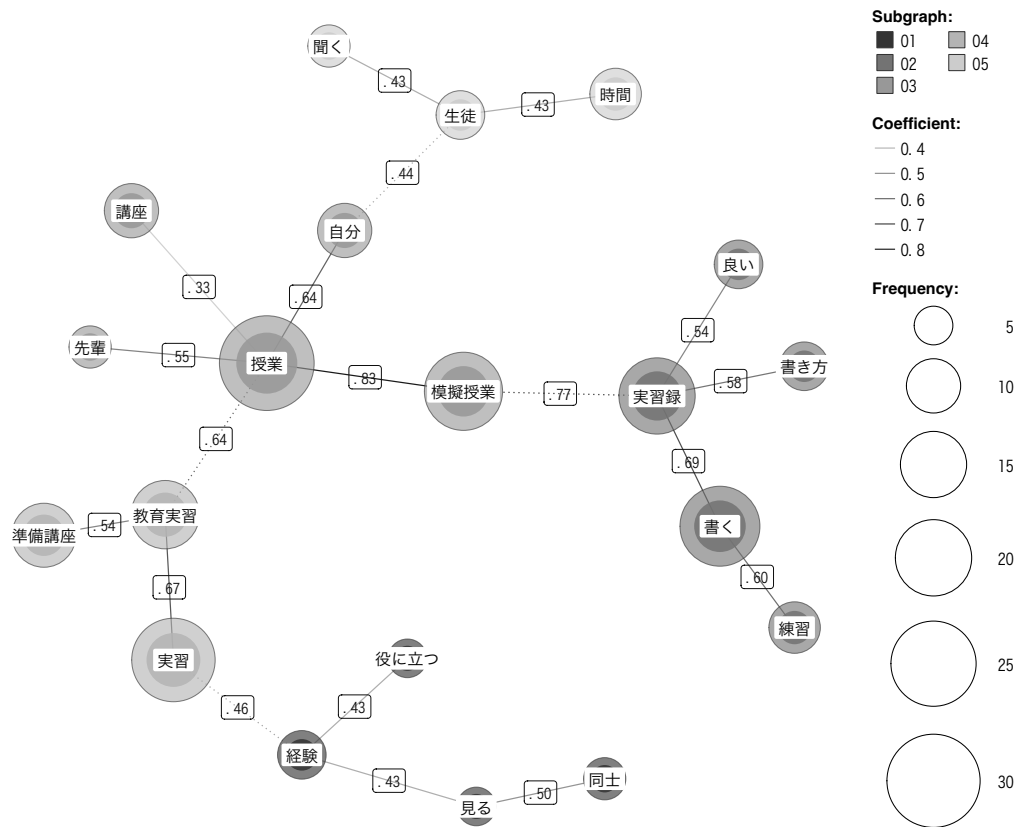


図3 教育実習準備講座に対する評価に関する共起ネットワーク

5.4. 考察

調査 2 の目的は、教育実習準備講座に参加した学生が、その講座に対してどのような評価をしているのかを探索的に明らかにすることだった。参加学生の自由記述の結果から、教育実習準備講座の意義を 3 点挙げるができる。

1 つ目は、学生が教育実習準備講座を体験し、実践的な経験を積むことの意義である。教育実習に行く前に、実習録の書き方や模擬授業をやってみるによって、教育実習で求められる実践経験を積むことができる。それが教育実習中に技術として役立っているだけでなく、教育実習中の不安低減のような心理面の負担軽減でも役立ったことが明らかになった。全学の教職を履修する学生には、実践的な経験を積む時間の不足が指摘されていたが、それを教育実習準備講座によって補うことができることが明らかとなった。

2 つ目は、学生間の関係づくりに教育実習準備講座が役立つ側面である。同級生との関係の中で模擬授業等を実践的に学ぶことで、全学の教職課程を履修する学生同士の横の関係が作られることも明らかになった。学生同士の横の関係が作られることで、教育実習中や教員採用試験に向けて励まし合う関係が築かれているようである。また、教育実習を終えた先輩から具体的な助言をもらうことで、教育実習に向けたイメージを持つことができ、それが教育実習に対する構えを形作る時間にもなっているようである。教員が指導するのではなく、教育実習を終えた先輩から具体的な助言をもらえることが、参加学生にとって役立っていると考えられる。

3 つ目は、教育実習を終えた後に、教育実習準備講座を振り返ることで、教育実習での経験と教育実習準備講座で学んだ内容を比較できることである。例えば、教育実習準備講座では、板書で模擬授業をやったが、教育実習中には ICT を活用した研究授業を求められたため、授業形態としては教育実習準備講座で取り組んだことが活かせなかったという評価が見られた。また、模擬授業では、大学生を相手に模擬授業をするために、授業がスムーズに進むが、内容を理解していない中高生を対象に研究授業をする場合は、予想外の反応があるた

め、同じ学科の学生に模擬授業をするだけでは限界があることが指摘されていた。しかし、このように課題を指摘できるのは、教育実習準備講座に参加した自分と、教育実習を経験し終えた自分を比較することで見えてくることであり、この比較を通して学生は自身の成長を実感することができる。

教育実習中の生徒との関係づくりを扱う時間を盛り込んでほしいという要望があったことが、教育実習準備講座の今後の課題として挙げられる。

(文責：金子泰之)

6. 総合考察

静岡大学に全学の教職課程に専任教員のポストが置かれたのは 2010 年 4 月である。2010 年度入学生から新設された教職実践演習 (4 年次後期) の開講にあたり、担当教員が必要になったためである。全学の教職課程専任教員の着任以前、全学の教職課程の学生は、教育実習や教員採用試験について、支援や指導はほぼされていなかった。教育実習や教員採用試験に不安を抱えていた学生もいたはずだが、それを受け取り対応する仕組みもなかったため、不可視の状態だったといえる。しかし、全学の教職課程に教員が着任したことで学生のニーズが届くようになり、教育実習校からも教育実習生に対する大学の指導不足が指摘されるようになった。その結果、全学の教職課程は教育実習等について、「教育実習の心構え講座」等を開講し授業外の指導も行なうようになった。教職実践演習は、大学生活を通じて教員として最小限必要な資質能力を身につけられていることを確認する教職課程の「出口」の質保証であり、教職生活を円滑に始められる科目として位置づけられた (中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」平成 18 年 7 月 11 日) が、静岡大学では専任教員の雇用の契機となり、全学の教職課程の学生に対する支援や指導体制にもつながった。では、本稿のテーマである教育実習の準備講座の考察として、意義と課題から総括する。

6.1. 意義

全学の教職課程学生の教職に関わる経験不足の補完 教育学部のカリキュラムでは教育実習前にも授業観察の機会があり、授業等に関わる記録をと

る経験を重ねている。しかし、全学の教職課程では教育実習前に学校で授業を見る機会はほぼ無い。また、授業案作成を学ぶ教科教育法は原則 2 年次での受講になり、教育実習に行く 4 年次には授業案作成時のポイント等が曖昧になっていることも多い。3 年次後期「教育実習事前指導」では授業案を作成するが時間が限られており、授業案の検討やその実施、実習録記述の練習は行っていない。このような経験不足の状態では学生が不安に陥るのももっともといえる。

また、実習録記述に対する不安の背景に、所属する学部で求められるレポートの違いがあると考えられる。実習録では、例えば授業の観察をした際に子どもや教員の気持ちを推測したり、教員から自身への指摘をもとに自省や今後の方針をたてたり、自身の成長を思考したりする。理系の学生がふだん書いている実験レポート等と比較すると相当性質が異なっているため、「何をどのように書けばよいかわからない」という状況になるのだろう。教育実習生の不安に言及した先行研究では「授業に対する不安」は指摘されていても(渡邊・枝元・藤谷・峯村・山本, 2022, 枝元・山本, 2017), 実習録記述への不安は指摘されていなかった。

しかし、静岡大学では以前より理系の学生を中心に実習録記述を苦手とする学生は少なくなく、実際、実習校の教員からも「(静岡大学の実習生の一部は)実習録の記入に時間がかかる」ことは指摘されていた。文系に所属する学部の学生からの相談はほぼ無いものの、教育準備講座の評価(調査 2)に「実習録記述」があがっており、「実習録の書き方については実習中に困ることがなかったためとても良かったです」「実習録の書き方は教わっていないと難しい部分があるのではと思う」「実習録の書き方の練習や模擬授業をしたことで教育実習中にすべきことや授業で気をつけるべきことを予め知ることができ、非常に有意義でした」とあった。文系学部の学生は記述への不安はなかったと思われるが、事前に書き方のポイントや書くタイミング等を知ったことで、よりスムーズに実習に臨めたと考えられる。

上記のように、授業実践や実習録を書く経験の少ない学生に対して、授業案作成・その検討・50 分

の授業実施、毎回実習録を書くという事前の経験は、実習生に求められることを明確に認識したことで不安解消に意味があったといえる。

学生の主体性を重視するグループワークの効果

本講座は当初(2020 年度)からグループワークで実施し、2021 年度から 1 つのグループに 1 人の上級生を含めて構成した。授業案や実習録は自身が作成するだけでなく、グループで閲覧したうえですべてのメンバーがコメントを出すため、自身の学びだけでなく、他者の学びにも関わることになる。調査 2 の結果より、グループワークを通じて、授業案や実習録記述に関する技術だけでなく、学生の不安解消という効果があったことがわかる(「模擬授業をして、先輩や友人にアドバイスをいただいたことで、教育実習での授業やそのアドバイスや自分の反省をいかすことができたと思います。授業の中身だけではなく不安をものすごく減らすことができたので」「私はたださえ文章を書き上げるのに人より時間がかかるので……他人の実習録を読むことが書きやすさの向上に役立った」「模擬授業の時に先輩方からたくさんの良かった点や改善点などのアドバイスをいただきました。それにより、自分では気づくことのできなかつた様々なことに気づくいい機会になりました。」「実際に自分で授業を作り皆の前で実践するということは今回の講座で初めてでしたので非常に良い経験になりました。教室でも講座の経験があったからこそ自信を持って取り組めたと思います。」など)。

さらに、準備講座以降も、教員採用試験の情報交換や授業づくりを自主的に行なう関係性にもつながっていた。全学の教職課程を履修する学生全体において教員免許を取ろうとする学生は一部であるため、全学の教職課程の学生の多くは友人という関係性ではない。そのため、教職に関わる情報共有や気持ちや経験の共有が難しい。島根大学では、開講制課程の学生のサポートの 1 つとして、教職をめぐる仲間との交流の場を作っている(山根・木下・三島・栗野・塩津, 2017)。参加している学生の多くが仲間との交流が広がったと感じ、教職へのモチベーションがあがっている(山根ら, 2017)。静岡大学は島根大学と異なり、2 月から 3 月の限られた期間に行なう支援であるが、学生同士で学ぶ

準備講座を通じて、教職に就くという目的をもつ学生間の関係が構築され、その後の学びや経験にも影響を及ぼす可能性を見出した。

4年生・大学院生の教職キャリアに生きる経験 助言者を担当する4年生・大学院生は教職志望者であり、彼らは教職に就いた後に教育実習生を指導する可能性がある。そのため教育実習生の不安の把握やその解消という一連の経験に意味があると考え、原則教職志望者に依頼している。

助言者には事前に1日の実施内容やタイムスケジュールを資料として渡しているが、それは目安であり、その時の状況をみながら助言者が調整しながらすすめていく。助言者はグループをファシリテートするだけでなく、3年生が効果的に学べるように、教員に提案することもある。

1つは見本の配布である(2021年度)。説明を聞くだけでなく「実習録の見本があったほうがわかりやすい」と自身の実習録を提供してくれた。この見本は2022年度受講生からも、記述のイメージがしやすかったと評価されている(「実習中に実習録を書くとなったとき、書き方に関するプリントがあることに安心したため、プリントを配っていただけただけでも良かった」など)。

2つに、模擬授業時のワークシートである。「授業者に授業の良かった点・改善点を書いたワークシートを渡したい。言葉で伝えるだけでなく、ワークシートは形にも残るから見直しができる」と一人の助言者から提案があった。他のグループの助言者もこのワークシートの使用を希望したため、全てのグループで活用された。助言者は3年生が効果的に学べるように工夫して指導にあたっており、3年生に「どうするともっとよくなるか」と尋ねて、意見を引き出していた。今後、助言者が準備講座で得た学びや教職キャリアへの影響の有無についても検討したい。

事前指導とは異なる学び 静岡大学では3年次後期に「教育実習事前指導」(以降、事前指導と記す。90分×6回)を開講している。準備講座と事前指導の内容は、授業案を作成するという点で重複しているが、異なる点も多い。事前指導と準備講座の違いについて示す。

1つは、指導助言者である。準備講座では教職セ

ンターの教員も関わるが、主に指導助言を担うのは4年生・大学院生である。彼らは、約1,2年前に実習を終えた元教育実習生であり、3年生の不安や「わからない」という気持ちに共感しながら、その解消に向けて助言する存在である(「教育実習に行ってきた経験のある人から、実際の現場での展開やスケジュール、大まかな実習の流れや実習録を書くコツなどを聞くことができたのは実習に行った際に役に立つのもそうだが、事前にイメージができるという点で非常に有意義かつ、落ちついて実習に臨める効果があった。」など)。

一方で、静岡大学の事前指導は中等教育機関で管理職を務めた教員が担当し、長年の教職経験をもとに指導する。そのため、両者は立場やキャリアや年齢等、さまざまな点で異なっており、指導助言の内容や3年生が期待するものは異なってくる。また、3年生と助言者は同じ学生という立場で、学年差は1~2年にすぎない。そして、上級生は同じグループに入っているため、3年生は困ったらすぐに質問できる。実際、3年生から「先輩に見ていただいて生のアドバイスをいただけた」「先輩が近くにいることで、教員採用試験、教育実習のことを気軽に質問することができた」等の感想がみられた。

2つに、準備講座の内容は授業と実習録記述に特化している点である。事前指導は教育実習に関わる内容、例えば教育実習の目的の確認、実習生の1日のスケジュール確認や教員や児童生徒に接するときの注意等多岐にわたる。そのため、授業案作成・その検討・授業実施や実習録記述に多くの時間を割くことはできない。先行研究において、事前指導が10回以上実施されている大学では、教育実習生の授業全般への不安が軽減されていたが(渡邊ら、2022)、事前指導を10回以上実施する大学は多くないと思われる。「教育実習事前事後指導」は1単位であるため、静岡大学における事前指導は6回で実施している。現段階において、静岡大学の事前指導の授業回数及び内容の変更は難しいため、教育実習支援として、事前指導とは分けて準備講座を実施することが望ましいと考える。

6.2. 課題

課題として、1つに、準備講座における教員や学生の日程調整の難しさがある。準備講座は正規の

授業として開講していないため、複数の学部・学科間の時間割調整が難しい。そのため、準備講座は後期の授業がすべて終わった後に行なっている。しかし、春休み期間であっても3年生、上級生、教職センター教員の開講日の調整は困難を極める。2021年度は、学生が全てに出席できなくても仕方がないと割り切って実施したところ、全てのプログラムに参加できなかった学生も少なくなかった。教育効果を考えると「授業案の作成・授業案の検討・模擬授業」は一通り経験したほうがよいので、2022年度は授業案検討の回について、実施日のほかに1日予備日を設け、模擬授業日は5日間設定しその中から都合の良い2日間を選んでもらうことにした。それでも日程が合わず参加できない学生もいた。

日程調整の難しさを解決するためには、正規のカリキュラムとして授業化することである。今回の調査より、準備講座は授業や実習録記述に対する不安を解消させていた。今後も事前指導と連携しつつ、準備講座を独立させて行ないたい。また、受講を希望する学生が、日程調整の不安が無い中、受講できるよう検討を重ねたい。

2つに、3年生のさまざまなニーズへの対応である。少数ではあるが、実際の教育実習と準備講座では状況が違っているため、調査2の結果では「あまり参考にならなかった」という意見もみられた（「実習録を書く練習や模擬授業はあまり参考にならなかったと正直思う。実習録に関しては、準備講座と実習で学ぶ内容や濃さが違いすぎるので、準備講座で実習録を書く練習をしてもそれが実習時に参考になったかと聞かれればならなかった気がする。ただ、実習録の書き方の資料をいただけのはとても参考になった。……人前で50分話す経験をするという意味では模擬授業はあってよかったと思う。）。同時に、準備講座で学んだことは実際の教育実習ではそのまま使えなかったこともあったけれど、経験に意味があったという意見は複数みられた（「模擬授業では、実際の実習では生徒たちはタブレットを利用していたために内容自体はあまり役には立たなかったが、『歩きながら話すこと』や『声の大きさ』など、指摘されたことはおおいに役に立った。…実習を終えて改めてこの模擬

授業を振り返ってみると、全然面白くない授業をしていた自分から、実習を通して発問方法や学習法などの引き出しが増えたことを再確認し、自分の成長を感じた。」「授業の構想にしても、一度実習の前にどれくらい自分が授業を作り上げるために時間をようするか把握するのに役立つ、模擬授業で用いたやり方を実習の授業にも流用できたりと大いに役立った。ただし、実際の授業とは生徒の人数や教室の広さ、設備などの違いがあり、大きなギャップがあったが、そこも含めて想像通りにはいかないという良い経験になったと思う。」など）。

教員は準備講座と実際の教育実習のギャップを認識しており、学生も同様に認識しているという思いこみがあり、この点については説明していなかった。3年生には、準備講座で学んだ内容がそのまま教育実習に使えないこともありうるという準備講座の限界も伝えたい。全てのプログラム（授業案の作成・その検討・模擬授業）の受講が有効と考えられることを伝えて、受講するかしないかについて選択してもらうのもよい。例えば、模擬授業よりも授業案の検討を多く経験したい学生には、予備日も含めると2日間参加できる。3年生が自身で必要な内容を選択できるようにしてもよいだろう。本調査で得られた準備講座の受講生の感想について次年度の受講生には伝え、選択の材料としてもらいたい。

（文責：松尾由希子）

引用文献

- 浅川和幸 (2022). 開放制教職課程修了学生の教職課程評価を考察する：何に不満を感じ、どのような改善を要望しているか 北海道大学教職課程年報, 12, 1-45.
- 枝元香菜子・山本礼司 (2017). 事前授業による教育実習不安の変容 -教職志望学生のセルフエフィカシーに注目して- 目白大学高等教育研究, 23, 11-19.
- 宮下 治 (2021). 開放制教職課程履修学生の教職課程に対する意識調査研究-2016, 2018, 2020の調査結果から 明治大学教職課程年報, 43, 55-64.

渡邊はるか・枝元香奈子・藤谷哲・峯村恒平・山本礼二 (2022). 教育実習事前指導における教育実践効力感の変容 目白大学総合科学研究, 18, 153-159.

山根伸子・木下公明・三島修治・栗野道夫・塩津英樹 (2017). 「開放制」教員養成における学生支援の現状と課題 - 「水曜倶楽部」3年間の取り組みを中心に- 教育臨床総合研究, 16,31-46.

付録:2020年度と2021年度の教育実習準備講座の実施状況を以下に記す。

準備講座は2020年度から実施している。その内容は「実習録の書き方指導」「授業案作成・その授業案の検討・模擬授業の実施」で構成しており、学生の意見や様子をふまえて改良してきた。もともと講座を始める前から、一部の学生より教育実習への不安、特に授業について相談を受けることがあり、個別に対応していた。しかし、調査1(「学生の教育実習に対する意識調査」。2019年1月実施)からも授業案作成への悩みや助言のニーズ等が明らかになり、2020年度から講座という形態で希望者が受講できるようにした。2020年度及び2021年度の実施概要について、表5及び表6としてまとめた。

表5 2020年度「教育実習の準備講座」の実施概要

実施日	内容	グループ構成	受講者数	助言者
準備講座前	「実習録の書き方のレジュメ」を3年次の授業(54名)で配布し、教員が解説する。			
2021年3月8日 14時25分～15時55分	【1 授業案についての相談会】 ・グループの中で授業案づくりについて、話し合う。質問があれば、上級生に質問する。	3年生 ※原則、同じ教科の学生で構成する	不明	大学院生 (教職志望者) —2名 教科： 数学
2021年3月18日 14時25分～15時55分	【2 授業案をグループで共有しよう】 ・3年生が書いてきた授業案について、グループで検討。質問があれば、上級生に聞く。			
2021年3月22日 14時25分～15時55分	【3 模擬授業】 ・模擬授業を行なう(1人50分)。			
2021年3月24日 14時25分～15時55分	【4 模擬授業】 ・模擬授業を行なう(1人50分)。			
2021年3月25日 14時25分～15時55分	【4 模擬授業のまとめと課題の整理】 ・全体で行なう。 ・感想と課題の共有。上級生の助言。			

表6 2021年度「教育実習の準備講座」の実施概要

実施日	内容	グループ構成	受講者数	助言者
準備講座前	「実習録の書き方のレジュメ」を3年次の授業(83名)で配布し、教員が解説する。			
2022年3月4日 12時～15時10分	【1 実習録と授業案作成の相談会】 ・グループの上級生が、実習録の書き方や授業案作成について説明する。 ・3年生がこの時間内に書いた実習録および授業案について、グループで検討。上級生の指導助言。	3年生・上級生 ※原則、同じ教科の学生で構成する	20名	大学院生 (教職志望者) —7名 教科： 数学、理 科、英 語、社会
2022年3月16日 10時20分～11時50分	【2 書いてきた指導案に対するグループ検討】 ・書いてきた授業案について、1人ずつ発表する。グループで検討。上級生の指導助言。 ・最後に実習録を書き、グループで検討。上級生の指導助言。			
2022年3月18日 12時～15時10分	【3 模擬授業①】 ・模擬授業を行なう(1人50分)。 ・グループで検討、上級生の指導助言。 ・本講座の最後に実習録を書き、グループで検討。上級生の指導助言。			
2022年3月24日 12時～15時10分	【4 模擬授業②】 ・模擬授業を行なう(1人50分)。 ・グループで検討、上級生の指導助言。 ・本講座の最後に実習録を書き、グループで検討。上級生の指導助言。			